

## ダニエル書8章23-25節 & 黙示録17章「獣の秘められた意味」

### 1A 終わりの憤りの時

#### 1B ギリシア王の時代

#### 2B 繰り返して発展する預言

### 2A 不法の秘密

#### 1B 荒らす忌むべき者

#### 2B 不法の人

#### 3B 反キリストの霊

### 3A 大淫婦を乗せる獣

#### 1B 七つの頭

#### 2B 底知れぬ所からの者

## 本文

今晚の学びは、ダニエル書 8 章で学んだことから見えてくる、獣、反キリストの姿を見ていきたいと思っています。まず、前回学んだところですが、8 章 23-25 節を読みます。「23 彼らの治世の終わりに、その背く者たちが行き着くところに至ったとき、横柄で策にたけた一人の王が立つ。24 彼の力は強くなるが、自分の力によるのではない。彼は、驚くべき破壊を行って成功し、有力者たちと聖なる民を滅ぼす。25 狡猾さによってその手で欺きを成し遂げ、心は高ぶり、平気で多くの人を滅ぼし、君の君に向かって立ち上がる。しかし、人の手によらずに彼は碎かれる。」

### 1A 終わりの憤りの時

#### 1B ギリシア王の時代

今の時期、イスラエルやユダヤ人の間では、ハヌカーがお祝いされています。今年は 29 日から始まり、8 日目に当たる 12 月 6 日で終わります。これは、ギリシアの王、アンティオコス・エピファネスによって荒らされた神殿を 2300 日後に奪還し、清め、奉献したことを記念する祭りです。

シリアのギリシアの国、セレウコス朝から、アンティオコス・エピファネスという人物が出て、荒らす忌まわしいことを行いました。まず、正統な大祭司を罷免し、また暗殺しました。アンティオコスに取り入るユダヤ人ヤソンが、賄賂をエピファネスに渡し、大祭司オニ阿斯三世を罷免させ、アンティオコスが大祭司を任命するようにさせました。ヤソンはその後、エルサレムにギリシア式のジムであるギュムナシオンを建てるなど、エルサレムをギリシア化していきます。そして、メネラオスというユダヤ人が、ヤソンとの政治的駆け引きに勝ち、大祭司の職をアンティオコスから獲得することに成功します。そしてオニ阿斯三世を殺します。

こうやって、エルサレムの異教化がさらに進み、アンティオコスは、神殿の敷地にゼウスの像を建て、それを拜むようにユダヤ人に強要し、祭壇には豚を献げさせ、豚の血を聖所のまき散らしました。このゼウスの像について、「荒らす忌まわしいもの」という名が付けられます。

この歴史を、ダニエル書は前もって預言しています。「8:10-12 それは大きくなって天の軍勢に達し、天の軍勢と星のいくつかを地に落として、これを踏みつけ、11 軍の長に並ぶほどになり、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所の基はくつがえされた。12 背きの行いにより、軍勢は常供のささげ物とともにその角に引き渡された。その角は真理を地に投げ捨て、事を行って成功した。」ここの「天の軍勢」とは、祭司たちのことであり、「軍の長」とは大祭司のことです。そして、常供のささげ物を取り上げられたのは、祭壇での牛や羊のいけにえが取り上げられた、ということです。こうやって聖所の基はくつがえされました。さらに、「背きの行い」というのは、ユダヤ人なのに、異教のギリシア宗教を積極的に取り入れていったヤソンやメネラオスのような者たちであり、それによって、角、すなわちアンティオコス・エピファネスに聖所での権力が引き渡されたのです。こうやって、真理を天から地に投げ捨てて、事を行いました。

## 2B 繰り返して発展する預言

これらの幻について、御使いガブリエルは、「終わりの時に起こること」と言いました。「8:19 見よ。私は、終わりの憤りの時に起こることをあなたに知らせる。それは、終わりの定めの際に関わることだ。」ここが大事なところ。ダニエルからすれば、確かにギリシアの王が行うことは、はるか先のことです。彼がこの幻を受けたのは、バビロンの最後の王ベルシャツアルの治世第三年、紀元前 550 年辺りで、宮清めは紀元前 165 年ですから、385 年後に成就する話になります。

けれども、ダニエルはこれまで、ネブカドネツアルの見た夢を解き明かし、また、自分自身が見た幻で、第四の獣から角が出て来て、それが全土を食い尽くし、踏みつけ、食い荒らすと預言していました(7:23)。それは、ギリシアの後に出てくる存在であり、歴史的にはローマ以後の話です。ですから、ギリシアから出てくる者の仕業によって、終わりの憤りの時であると言われることには、ダニエルはどう感じたか分かりませんが、違和感があります。

もう一度、23-25 節を見てください。この読んだ箇所は、アンティオコス・エピファネスにおいて成就しました。けれども、2 章における足と足の指の状態、7 章における、第四の獣から出てきた小さな角の姿をも表している姿であります。近未来においては、そのギリシアの王において成就したけれども、遠い未来、終わりの日においては、ローマ以後の世界から出てくる反キリストにおいて究極的には成就する、ということでもあります。二重の成就と言ったらよいでしょうか。預言が、近未来だけでなく、実は発展して、折り重なるように成就して、究極的には終わりの日に完成するという姿が見えてくるのです。

聖書はとても不思議な書物です。初めに起こったことが原型となって、似たようなことが反復的に、かつ発展して成就していく姿を見ます。

例えば、ヤコブの息子ヨセフは、兄たちに売られてエジプトで奴隷となりました。しかし彼が王の次に権力を持つ者となり、その彼の前で兄たちはひれ伏すこととなります。同じようにして、約四百年後に、モーセがイスラエル人には理解されず、エジプトからミディアン人の間に住み、その後イスラエル人のところに戻ったら、彼は預言者として認められました。一度目は拒まれるのですが、二度目に受け入れられるのです。ヨハネ 1 章には、キリストが、ご自分のところに来たのに、受け入れられなかったとあります。けれども、ゼカリヤ 12 章には、突き刺した者が主であることを知った、エルサレムの住民が悔い改める預言があります。初めは拒んだけれども、次に現れる時には受け入れるという流れです。

預言者エレミヤのことも思います。彼は、ユダヤ人を愛してやまず、それで、バビロンによってエルサレムが破壊されることを預言しました。彼は、破壊されたエルサレムを悼み悲しむのに、哀歌を書きました。イエス様は同胞の民ユダヤ人を愛し、しかし、エルサレムがローマによって破壊されるのを見て、嘆き悲しみました。ユダヤ人の間には、彼はエレミヤではないのか？という意見まであったほどです。エレミヤは、バビロン捕囚後七十年をして、民がバビロンから解放されて帰還することを預言しましたが、イエスご自身は、ユダヤ人が世界に散らされるが、選びの民は大患難を経て救われ、人の子が来られる時に、天の果てから戻って来ることを預言されました。

神の裁きについても、似たようなことが反復します。ヨシュアたちが、ヨルダン川を渡河し、そこにあるエリコの町を攻め取りました。その時に神は、祭司たちにラッパを吹き鳴らせ、行列を作って、城壁の周りを一日一周、七日間回るように命じられました。そして七日目には、七週を周るように命じられたのです。黙示録には、七つの封印が解かれて災いが下ります。その第七の封印が解かれた時に、七人の御使いが現れ、ラッパを吹き鳴らしました。そして第七のラッパを吹き鳴らした後で、七つの鉢による裁きがありました。同じような流れを見るのです。

神は、私たちにご計画を持っていて、同じようなことを繰り返し、しかも発展させてお見せになることによって、私たちに究極のご計画、終わりの日の救いに対する希望をしっかりと身につけてほしいと願われているのか？と思います。パウロは、エペソの長老たちに、「私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。(使徒 20:27)」と言いました。

そして、このことは、同じ神が、歴史を展開させておられるということが分かります。旧約時代においても、キリストの御霊が働いておられ、その歴史の一コマ、一コマに、キリストの証しを立てておられると言ってよいでしょう。使徒ペテロが第一の手紙でこう言いました。「1:10-12 この救いについては、あなたがたに対する恵みを預言した預言者たちも、熱心に尋ね求め、細かく調べました。

11 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証したときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。12 彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。」旧約時代の預言者たちが、キリストの御霊がうちにおられたとペテロは、言っています。

## **2A 不法の秘密**

そして、反キリストについても実は同じで、「不法の秘密」とも呼ばれる、反キリストの霊、サタンによる霊が働いていて、それが反キリストという人物で究極的に現れるということを示しています。

### **1B 荒らす忌むべき者**

「荒らす、忌まわしい者」について、ダニエルがまた別の預言で示されます。9章27節です。「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」そして主ご自身が弟子たちにオリーブ山で語られました。「マタ 24:15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——」もうこれは、ギリシアの王の話ではないことは明らかです。時はローマの時代、ギリシア時代はとうの昔に過ぎ去りました。主ご自身が、終わりの憤りの日に究極の成就することを教えておられます。

### **2B 不法の人**

そしてパウロが、テサロニケの人たちに送った第二の手紙で、こう話すのです。「2:3b-4 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」反キリストを、「不法の者」と呼んでいます。そして興味深いことに、まず背教が起こると言っています。アンティオコス時代、まずギリシア化されることを自ら願い、王に取り入ったヤソンやメネラオスなど、背教が起こってから、荒らす忌まわしいことが起こりました。それと似ています。そして、神の宮に自ら神と宣言して座ることになります。

そして、その次を読むと、パウロがとても意味深なことを言っています。6節から読みます、「2:6-8 不法の者がその定められた時に現れるようにと、今はその者を引き止めているものがあることを、あなたがたは知っています。7 不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。8 その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」不法の人が現れ

るのは、引き止める者がいるからなのですが、「不法の秘密はすでに働いています。」と言っています。ここが、なぜ預言が反復し、発展し、終わりの日に究極の姿を見せるのか分かる箇所です。

サタンは、不法の人によって自分の力、位、権威を表すべく、昔から働いていたのです。不法の秘密をすでに働かせていました。そのために、ギリシアの王が出てきた時、彼の背後で働いていたのです。そして、ローマ時代に主によって荒らす忌まわしい者が預言され、パウロによっても、不法の秘密として示されていたのです。聖書の言っている秘密とは、ずっと隠されているという意味ではなく、むしろこれまで隠されていたけれども、今や明らかにされたという意味です。ですから、間もなく不法の人が明らかにされるという意味合いで、パウロは秘密という言葉を使っています。

### 3B 反キリストの霊

ヨハネが福音書を書き、手紙を書き、そして黙示録も書き記したのは、紀元後 90 年代です。その時には、霊知とも呼ばれる、グノーシス系の異端がはびこっていました。ヨハネは、はっきりとそれが異端であることを、第一の手紙で論難します。彼らは、自分たちの知識こそが高等な知識で、それによって神に近づき、使徒たちの教会にはそれが隠されているからとして、既存の教会から出て行きました。しかしヨハネは、キリストが肉体を取られたからこそ、そこに命があるのであり、見える教会に、キリストのからだがあることを教えます。知識の中で高ぶり、キリストが肉を持たれていたことを否定したのです。ヨハネは、彼らのそのような心を「偶像」として非難し、手紙の最後は、「子どもたち、偶像から自分を守りなさい。」と言いました(5:21)。

そうした背景の中で、ヨハネは 2 章 18 節でこう語っています。「幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。」多くの反キリストが現れていると言っています。けれども、初めの「反キリストが来ると」というところは、単数形です。しかも、the という英語の定冠詞に相当するギリシア語がつかわれています。ヨハネは、荒らす忌まわしい者、パウロが不法の人と呼んだその人を反キリストと呼んでいて、けれども、今、多くの反キリストが現れているということです。4 章 3 節には、「イエスを告白しない霊はみな、神からのものではありません。それは反キリストの霊です。」とあります。そう、サタンの霊が働いていて、反キリストの現れの前に、すでに多くの偽教師たちの間に働いていたということです。

肉体を取られた神、キリストを告白しない霊です。こうした霊が働いているということ。ヨハネ第一の手紙の学びの時にも話しましたが、今は顕著です。既存の、からだを持ってくる教会、地域教会がキリストのからだとして否定されます。代わりに、ネットでの情報に取って替えられ、体を持っていて、真実と行いによって示される愛ではなく、知識があることが目的になっています。キリストではなく、それ以外のものが自分たちのアイデンティティー、存在意義になっています。コロナ禍において、ますますその動きが加速しています。ヴァーチャル・リアリティーや AI が、宗教の世界に

も入り込んでいます。韓国で、娘を失った母親に、VR の中で合わせ慰めを得るといふもの。AI ロボットが、教会にしろ、お寺にしろ、神父や坊さんになって、祈ったり、相談を聞いたりするもの。黙示録 13 章には、獣、反キリストの像が造られて、その像がものを語るようになることが預言されていますが、まさに偶像にものを語らせる、その空気、霊が満ちています。

このようにして、不法の秘密はすでに働いています。いつ何とき、不法の人が現れてもおかしくない、ということです。言い換えれば、いつ何とき不法の人が現れてもおかしくないということは、いつでも終わりの日が切迫しているのです。これが、多くの人が「終わりが近いとかいって、ずっと経っているのに、まだ来っていないではないか。」と嘲ることに対する、解答になります。いつ何とき、という物理的な時間の尺度で見るとはならず、今そういう時期なのだという状況として見ていく必要があるのです。

### **3A 大淫婦を乗せる獣**

#### **1B 七つの頭**

ダニエル書 7 章の学びの時に、第四の獣と黙示録との関連をお話しました。黙示録 13 章に、その獣が現れていますが、ダニエル 7 章といささか違う姿をしていました。最も大きな違いは、頭が七つあることです。「13:1 また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。」12 章の、赤い竜の幻においても、竜が「七つの頭と十本の角」を持っています(12:3)。この七つの頭は何を表しているのか？それは、13 章の獣が、これまでの世界帝国を表す獣の合体であることから見えていきます。13 章 2 節に、こうあります。「私が見たその獣は豹に似ていて、足は熊の足のよう、口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。」豹はギリシア、熊はメディア・ペルシア、獅子はバビロンを表していますが(ダニエル 7 章)、それらの特徴をすべて持ち合わせているのです。そして十本の角がありますから、ローマとそれ以後の国を表しているのです。

この正体を暴くのが、黙示録 17 章です。そこには、大淫婦として出てくる大きな都バビロンの姿があります。大淫婦が、世界の王たちと淫らな行いをして、富を集めている姿が出てきます。彼女が獣の上に乗っかっているのです。「17:3 それから、御使いは私を御霊によって荒野へ連れて行った。私は、一人の女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神を冒瀆する名で満ちていて、七つの頭と十本の角を持っていた。」七つの頭と十本の角を持っています。

使徒ヨハネは、この姿を見て驚いています。御使いがそこで答えます。長くなりますが、読んでみましょう。「17:7-11 すると、御使いは私に言った。「なぜ驚くのですか。私は、この女の秘められた意味と、この女を乗せている、七つの頭と十本の角を持つ獣の秘められた意味を、あなたに話しましょう。8 あなたが見た獣は、昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上って来ますが、滅びることになります。地に住む者たちで、世界の基が据えられたときからののちの書の名が



です。「初めの五人は既に倒れた」とありますが、エジプト、アッシリア、メディア・ペルシア、そしてギリシアは既に倒れました。「一人は今いる」というのは、ローマです。ヨハネはローマ皇帝ドミティアヌスの支配下にいました。そして、「もう一人はまだ来ていません」というのは、これからの十人の王による支配、ローマ以後に現れる、ローマの特徴を持ち合わせた世界です。ダニエル 7 章の第四の獣の、十本の角に相当する世界です。

## 2B 底知れぬ所からの者

そして 17 章 11 節、「また、昔はいたが今はいないあの獣は八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり、滅びることになります。」という言葉ですが、反キリストは七人のうちに一人でもあるということです。これは、十の王が支配する国の中で彼が現れます。第四の獣の十本の角の間から小さな角が現れました。そして三本を引き抜き、さらに大きくなっていきます。十人の王の支配するところから、彼が出てきたことで七人の王と彼がいるのですが、残りの七人の王は、彼に自分の権力を移譲します。そして、それが、彼独りの支配する世界、獣の国、世界政府となるのです。それが八番目の王ということになります。

したがって、「昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上って来ます」という言葉を理解するのは、ダニエル 8 章の預言にある知識が必ず必要になるのです。ギリシアの王アンティオコス・エピファネスが昔いて、彼のような人物が底知れぬ所から将来、上って来るということ、ローマ以後の世界、復興ローマと呼んでもよいでしょうか、十人の王が支配する世界から上って来るのです。これで、ガブリエルがダニエルに話した、「終わりの憤りの日」と、ギリシアの王のことを話しているながら、なおほるか先のことも話している理由がお分かりになったでしょうか？

テサロニケ第二 2 章には、不法の秘密が働いているけれども、引き止める者がいるという言葉がありました。その解釈は、教会に働いておられる聖霊であるという見方もありますし、何らかの御使いのような存在という解釈もあります。いずれにしても、聖なる神によって遣わされた存在、聖霊にしても御使いにしても、地上にある教会の証しが引き止めていることだけは確かです。その中で、私たちは知恵をもって生きていくように命じられています。「エペ 5:15-16 ですから、自分がどのように歩んでいるか、あなたがたは細かく注意を払いなさい。知恵のない者としてではなく、知恵のある者として、16 機会を十分に活かみなさい。悪い時代だからです。」悪い時代には、知恵ある者として機会を十分に生かします。みこころを、困難な時代でも行っていけるように、知恵が与えられるように祈りましょう。